○１０月の人権に関する月間・週間・記念日　「精神保健福祉普及運動」「国際高齢者デー（１０月１日）」「犯罪被害者支援の日（１０月３日」

十島村教育委員会だより　平成３０年９月号

辻わかトーカラ情報

南北１６０㎞　「心をつなぎ　気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒 892-0822 鹿児島市泉町 13 番 13 号
TEL　099-227-9771

９月・・・諏訪之瀬島にて

十島村教育長　有　村　孝　一

９月 11 日に諏訪之瀬島小中学校の学校訪問に行きました。鹿児島教育事務所と村教委との合同訪問です。教育事務所長以下４名と村教委から２名の計６名による訪問です。「フェリーとしま２」は、台風の被害のため切石港が使用できずに、元浦港に接岸しました。まだまだ暑さが厳しいでした。学校に行くと校長より学校経営についての説明を受けました。グランドデザインに基づき、校長の熱い思いを聞かせていただきました。その後、授業参観をしましたが、その時には、教育委員の濱田さんも合流してくださいました。

わずか６人の児童生徒ですが、熱心に授業を受ける姿を見て感心しました。１対１や１対２の授業で、息をつく暇もないぐらいでしたが、みんなのびのびとしていたのが印象的でした。その後の研究授業も、楽しくアットホームな雰囲気でなされていました。

その日の夜は、新節（アラセツ）の行事に参加し踊りました。旧暦の初丙の日を中心に三日間行われるものです。八月丙の日をもって、この年の収穫を一切終わり、次の年に備えるという意味があります。

その週の金曜出しの船で、再び諏訪之瀬島に運動会に参加するために行くことにしました。波の影響で、土曜日に順延になり、しかも日帰り便（宝島折り返し）になりましたが、それまでに運動会は終わるということで、出発しました。島民５５名による大いに盛り上がった運動会が展開されました。

そして、やがて船が来るというので、急いで帰る仕度をして港に行きました。フェリーは平島の方からやってくるのが見えました。「バタバタだったけど楽しかったな」などと思っていたら、すぐそこまで来ていたフェリーが方向転換をして、中之島の方に向かいました。抜港です。言葉では聞いていましたが、実際に体験するのは初めてでした。「こんな気持ちになるのかあ」と思いました。乗船予定だった１４名の皆さんも同じだったことでしょう。どんな気持ちだったかは、ここでは書きません。

そういえば、うねりが高く、港を波が洗っている状態でしたので、もしかしたらという気はしましたが現実になると何とも言えない気分でした。平島や小宝島の人たちの気持ちが少しはわかる気がしました。日帰りの予定が２泊して名瀬に回って帰る事となりました。

宿泊をするということになったので、運動会の反省会と柴挿（シバサシ）の行事に参加することが出来ました。柴挿は、旧暦八月の初壬（または葵）の日を中心に三日間行われるものです。壬（ミズノエ）・癸（ミズノト）をまとめてミズノネといい、水の根祭り水の神様の信仰からきています。ここでもたくさん踊りました。

奄美の伝承が、ここ諏訪之瀬島でも脈々と伝えられているということに、改めて思いをはせることでした。抜港はありましたが、多くの収穫があった諏訪之瀬島での一週間でした。

おめでとうございます。

地域が育む「かごしまの教育」県民週間
標語　入選　悪石島小　６年
森木　洋那　さん

※　各学校は、皆様の訪問をお待ちしています。

「街中へ　届け僕らの　笑い声」

※ 10/17 ～ 10/30 作品は、山形屋のブリッジギャラリーに展示予定。

シリーズ――新聞に投稿(南日本新聞「若い目」)

（平成30年８月16日　木曜日）
中之島小1年　おばらざわこうき

おおきいのがつれた

「うわあ、おもたい。」ぼくは、こどもかいのさかなつりたいかいで、おおきなブダイをつりました。ぼくのしんちょうの、はんぶんくらいのおおきさで、４・１キロのおもさのおおきなブダイです。

ブダイがかかったとき、さおは大きくまがって、いとがきれるかもとおもいました。おとうさんにてつだってもらって、５ふんくらいずっとひっぱりました。

まるで、ぼくとブダイのたたかいみたいでした。そのあと、ちいきのひとに、たもですくってもらいました。「これは、おおものだ。こうきは、つりめいじんだね」といわれて、とてもうれしくなりました。

そのひ、ぼくがつったブダイをてんぷらにして、がっこうのみんなとたべました。ぼくがつったので、さいしょにあじみしました。とてもおいしかったです。

シリーズ――新聞に投稿（平成30年８/29 南日本新聞）

悪石島小5年　片野田 奏

西郷隆盛を知る

「郷土かごしまの未来を担う青少年の育成事業～沖永良部島の西郷どんと敬天愛人」という研修会に参加した。沖永良部島に着き、船を下りると、わたしが一番楽しみにしていたことは、沖永良部島で、流刑にあった西郷隆盛がどのような生活を送っていたのかを知ることだった。

沖永良部島は青い海が広がり、港にはたくさんの真っ青な笑顔にあふれていた。思わずほっぺたが、ひびいてしまった。大河ドラマで見た、10分の移動すると、わたしも笑顔にあふれて、２畳ほどの広さの海辺の牢があった。

この中に、西郷は約２ケ月間、冬の寒さで、かべはない。

さらにたえながら暮らしていたという。さらにおどろいたのは、この島に食料が少ないことを知った西郷は、自分の食事を食べず、島民に与えていたということだ。自分の死よりも他の人のことを思うことのできる人、それが西郷隆盛なのだと知った。

わたしはこれから、西郷のように、他人を思いやり誰からも尊敬される人になりたい。そのために「早速今日から自分を変えなければ」と心に決めた。

シリーズ――新聞に投稿(南日本新聞「若い目」)

（平成30年9月3日　月曜日）
小宝島中2年　有馬　凜

遠くても近い存在

あなたの友達はどこにいますか。私の学校には私を含めて６名の生徒がいます。でも、女子は私だけです。山海留学して６年たちますが、ここ３年ほど、同級生の女子は１人もいません。

十島村には七つの有人島があり、それぞれに学校があります。交通手段が限られていて、他の島とはなかなか行き来できません。「女子の友達がほしいな」と思っている中、ある島から「これから文通しましょう」という手紙が届きました。

今まで、何回も手紙をやり取りしましたが、話題が尽きることはありません。島のことや学校のことなど、お互い知らない情報が更新されていきます。月に２回ぐらいのペースで、文通を続けています。週２便の村営船で届く、手紙を毎回楽しみにしています。

シリーズ――十島村で学ぶ

小宝島での残りの生活　小宝島中3年　萩原　康成

小宝島港に，フェリーとしま２が入港する。いつも，荷役組合の人達が，通船作業を行っている。私の父も，通船作業をしている。父の皮手袋をある時見た。指先が破けている。フェリーが入港して，ロープを引いたり，離したり大切な作業だ。でも，皮手袋が破れるくらい大変だとは思わなかった。私も，生協が来たときは，地域の方々と仕分け作業を行っている。

こういう生活を過ごして，１年６か月が過ぎた。小宝島での生活は，本当に初めてだらけだった。初めての一輪車・初めてのキャプテン・初めての農園作業・初めての応援団長。初めてを数多く体験させてもらった。

でも，小宝島での生活も残り半年になった。だから，この半年を私は，学校の友達・先生・地域の方々・両親と精一杯良き思い出をつくりたい。

そして，来年の４月からは，小宝島を離れての生活になるが，小宝島で体験したことを少しでも生かしていきたいと思っている。

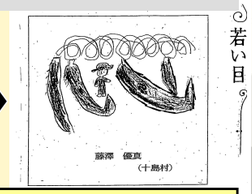
村民文化祭が近づいてきました！

１１／３（土）開催予定の「フェリーとしま２」就航記念　「第３回文化の祭典セブンアイランド」(村民文化祭）実行委員会が、１０月１日（月）13:00 から開催されます。

各島の自慢の演目や当日までの流れ、出演者や参加者の確認、費用等多くのの議題が予定されています。いよいよ最終の実行委員会です。

２０１８・第７２回「読書週間」
期間：平成３０年１０月２７日～１１月９日
標語：「ホッと一息 本と一息」
主催：（社）読書推進運動協議会
※セブンアイランド図書、県立図書館図書があります。秋は、読書の季節です。

８月１８日掲載
南日本新聞「若い目」
悪石島小３年
藤澤　優真



平成３０年度
青少年の活動・育成団体助成団体
諏訪之瀬島子ども会 決定！

日本教育公務員弘済会鹿児島支部から、青少年育成活動への助成として、50,000 円の助成金が決定したとの連絡がありました。　子ども会の活動に役立ててください。

中之島小・中学校からのメッセージ

教諭　杉野弘一

「台風を通して感じたこと」

８月中旬に台風１９号が十島村に直撃した。中之島もかなりの被害にあった。その中の１つに，４日間に渡っての停電があった。電気が通じないことで暑さや不便さに苦しんだが，その間に自分の生活を振り返ることがあった。

鹿児島市内に住んでいるときには，電気・水道などのライフラインは，あって当たり前のもので，誰がどんなことをしてくれているのかは深く考える機会があまりなかった。しかし，今回の被災にあたっては，現業さん，発電所の職員の方をはじめ，多くの方々が復旧のために尽力してくださる姿を目の当たりにした。私も，微力ながら手伝いをさせてもらったが，私たちが当たり前にしている暮らしは，見えないところでいつも誰かが支えてくれていることを改めて実感した。

当たり前のものがないことで，当たり前にあるものや島の方々への感謝やすばらしさを感じたとともに，今まで「してもらう」ばかりだった私に気付いた。そんな私が，この島のために最も力を尽くせることは，子どもたちへ充実した教育を提供することだ。２学期は，これまで以上に子どもたちの健全な育成，学力の定着に力を入れていきたい。

『教職員仲間であるあなた』への私からのメッセージ」

十島村では，本土で経験できないことがたくさんあります。それが，きっといつかの自分の財産になり，思い出になるはずです。お互い頑張りましょう。